

## 多摩川散歩

### ■多摩から発信! 緑のまちづくり■



NPO法人  
NPO birth (バース)  
事務局長 佐藤 留美

「まちの中に森がある!」。大学進学のため、仙台市から多摩地域に引っ越してきての最初のカルチャーショックは、まっ平らな土地に雑木林があることだった。住宅地の中に畑があり、無人野菜販売所があることも驚きだった。湧水の流れるお鷹の道、玉川上水の緑陰、雄大な多摩川、どこまでも続く丘陵地の連なり。地方人の持つ「東京＝高層ビルが林立する都会」というイメージはことごとくひっくり返されてしまった。

私は幼いころから昆虫が大好きで、一日中、虫と戯れていれば幸せ、という一風変わった女の子であった。一方、テレビでは米ソ冷戦のニュースが日常的に流れ、「なぜ人間はこんなに愚かなんだろう。核戦争が起こったら大好きな自然も失われてしまう」と絶望感を抱きながらも、自分は何をすべきかと悩んでいた。

そんな中で出会った多摩の自然が、自然と共存する人間の知恵から生まれた風景であることを知り、私は救われたような気持ちになった。雑木林の落ち葉を歩いて、堆肥をつくり、田畑を耕す。その営みが、野草を増やし、カエルやトンボの住処をつくり、風景を彩る。「人間が手を入れることで、自然が豊かになるなんて、なんて素



市民が守り育てる雑木林  
(小平市・コゲラの森)

晴らしいんだろう!」けれど、そんな風景が、開発によりみるみる消えていく。林や田畑は、住宅や駐車場に変わっていく。考えてみれば私の住むアパートだって以前は雑木林だった。開発か保護かといった二者択一ではなく、人と自然の新しい共存のあり方を探す必要を感じた。

大学卒業後、多摩地域での環境保全活動に加わる中で、自然を守るためには、人と自然、人と人とのつながりを創ることが一番の近道だと感じ始めた。同じ想いをもった仲間との出会いがあり、私たちは1998年にNPO法人「NPO birth (バース)」を設立した。「birth」とは、命を育むみどり、新たな時代の流れを生み出したいとの願いを込めてつけた団体名である。



市民による公園づくり  
ワークショップ(府中市)

同年にNPO先進地である米国・サンフランシスコのNPO研修へ参加した。米国では、「市民」が公園緑地や河川の環境を守り育む主役である。その市民力を強力に下支えているのが、NPOである。自分たちもこのようなプロのNPOとなり、まちの緑と人のつながりを創ることで、人と自然が共存できる暮らしの環境を実現したい。

そのような想いを胸に、緑のまちづくりの調査や環境パートナーシップ促進事業、愛知万博出展などの取り組みを進め、2006年より都立公園の指定管理を担うチャンスを得た。東京都が力点を置いていたのは市民との協働による公園づくりという、まさに私たちが目指す方向であった。力を発揮できるフィールドを得て、私たちの思いは次々に実現していった。管理している東京都立野山北・六道山公園(武蔵村山市)では、公園ボランティアが2006年度の68名から2009年度には3.7倍の247名に急増し、年間参加人数は5,000人を超える規模となった。「この自然を次世代に伝えよう」と同じ目標をもつ市民ボランティアは、雑木林や田んぼの手入れ、自然調査や文化の伝承など、さまざまな分野で生き生きと活動している。こうした活動が認められ、同公園は昨年10月の「都市公園コンクール(主催:社団法人日本公園緑地協会)」で国土交通大臣賞を受賞した。

私たちが次に目指すのは、公園管理で培ったノウハウを、「まち」単位に広げていくことである。街中の小さな緑地や児童遊園、大きな公園や河川敷、農地や雑木林など、そこで活動する市民のネットワークを築くことで、人と自然が共存できる地域づくりに貢献したい。



里山春祭りで活躍するボランティア  
(武蔵村山市・都立野山北・六道山公園)